MISS YOU

みどりむし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＩＳＳ　ＹＯＵ

【Ｎコード】
Ｎ５９４９Ｅ

【作者名】
みどりむし

【あらすじ】
大学生活をおくるのは、細川（はじめ）一。彼は、中学時代の失恋から立ち直れないでいた。ある日、その失恋の相手である武内朋とばったりと再会を果たす。動揺する一。そして、それに追い討ちをかける出来事が彼を襲う。はたして、彼と彼女の行方は・・・・。

序章　（前書き）

これはフィクションです。
実際の人物、団体とは一切関係ありません。

序章

最近、悩みが多くなった。気づいたらため息をついている自分がいる。　高校生活もあと4ヵ月……。大学入試も目前。その緊張もあるのか……胸が痛い……。
でも、なんでこんな時にこんな気持ちになるのかな？多分、あの人に会うたびに思い出してしまうから、複雑な心境になるんだ。そう、勉強に一直線に取り組めていない自分がいながら、他のことにとらわれ続けている自分がいるのがつらい。

中学校の卒業式当日。
僕は心に決めていたことがあった。2年の時から気になっていた朋ちゃんに思い切って告白することを……。在学中から機会を見計らって近寄ろうとしていたが、なかなかできなかった。というより、その勇気がなかった。でも離ればなれになる前にどうにかこの気持ちを伝えたい。そう思った僕は、その日に行動にでることに決めた。

式が終わり、在校生に見送られて外にでた僕は勇気を振り絞って近づいていった。

「朋…ちょっと話があるんだけど、いいかな。」
「え？いいけど……」

僕は人ごみから彼女を連れ出し、校門の方へ連れて行った。
この先から、何を言ったのか僕はわからない。頭の中が真っ白になっていた。ただ、彼女がなんと言ったかははっきりと覚えている。

「一君は誠実だし、前からいい人だなぁって思ってたよ。でも、あたしのいく高校の部活は男女交際禁止だから……」

僕の初恋はあっけなく終わってしまったのだった。

それから月日はあっという間に過ぎ、春休みをほのぼのと過ごしていた。大学入試は無事合格し、その足でバイクの免許をとりにいった。両親と約束してバイクを買ってもらうことになっていたのだ。うちの高校は免許をとらしてくれないし、見つかったらよくて停学になってしまう。この何年間気持ちを抑えながら待ちに待った瞬間だった。彼女のことを忘れることができるかと思われた。

僕は新聞配達のバイトを始めた。朝4時からバイクに乗って新聞を配る。朝早く起きての仕事はきつくないと言ったら嘘だが、早く起きれば、それだけ充実した気分にひたれるし、なにしろ朝の風は格別で、気持ちが良かった。

それからもうすぐで3年になる。実は数回メールのやりとりもしていたが、ある日からぱったりと返事がこなくなった。
でもそれでいいと僕は思っていた。彼女は高校に部活の推薦で行っているのだし、僕がへらへらとメールをするたびにあの日のことを思い出すだろう。疲れて家に帰ってはそんな調子じゃ、集中できたもんじゃない。しかも相手に気を使いながらじゃなおさらだ。正直、迷惑かけてるのはこっちだろうということぐらい、馬鹿な自分でもわかっていたから。僕はあきらめるつもりでいたのだ。
だが、実際のところ僕はあきらめ切れないでいた。時々駅で顔を見るたびに、胸を切り裂かれるような気持ちになった。自分がいやになった。

第一章　再会

ある日、バイトを終えて家に帰る途中、駅の方から歩いてきている人に目がいった。よく見ると、なんと朋ちゃんではないか。でもどうしてこんな時間に駅の方から…。この時間はバスが少ないから歩いて帰っているんだろうけど…。それに、彼女の家には行ったことはなかったが、住所は知っていたし、まだまだ何キロか歩かなければならないことは確かだろう。

「朋ちゃ～ん！久しぶり！」

僕はバイクを寄せながら言葉を投げかけた。

「あ～っ！一君、久しぶり～！バイクの免許取ったんだ。」

懐かしい声だ。よく考えてみたら、高校の時は話しかける機会なんてなかったから、まるっきり3年ぶりだ。

「家まで送ろうか。」

「えっ！いいの？」

「いいよ、俺、今日は大学休みだから。」

「お願い。もう駅から歩いてきたからもう疲れちゃって。」

僕は彼女を乗せて走り出した。彼女の腕の圧迫が気持ちよかった。変な意味ではなく・・・。

彼女の指示を受けながら、バイクを進めた。

「つ～いた。」

彼女はピョコっとバイクから降りた。

「ありがとうね。S君。何かお礼したいけど…う～ん、何がいい？」

お礼。僕に？そんなつもりじゃなかったし、お礼なんていらないのに。

「そうだ！今日、休みって言ったよね！？じゃあ、ご飯でも食べに行かない？」

僕は頷いた。ただ予想外の進展に驚き、声がでなかった。

「じゃあ11時に迎えに来て。」

「あ、ああ・・。OK。」

僕はいまだに事態の進展についていけていなかった。これって、デートだよね…。そう考えたら急に胸が高鳴り始めた。

午前11時。僕はバイクに乗って彼女を待っていた。カチャッとドアが開く音がした。彼女は先ほどとは違うラフな格好で出てきた。

「お待たせ～。さっ、いこ！」

バイクに乗って僕にしがみつく。僕は内心、少し狼狽しながらバイクを進めた。

「何が食べたい？あたしおごるよ～」

信号で止まっていたとき、彼女が言ってきた。

「まさか。俺がおごるよ。」
「えぇ？それじゃあお礼にならないじゃん。」
「いいんだ。」
「……。」
『まずい。会話が途切れる。なんとか話さないと……。』
「場所は、俺のおすすめのところでいい？良い店知ってんだけど。」
「うん……。任せる。」
『なんかさっきから元気無くないかな…。どうしたんだろ。なんかまずいことでも言ったかな。』

バックミラーで信号待ちの時にチラッと見てみた。ハーフヘルメットを被る、愛らしい顔が見える。でも、その顔を見たとき僕は言葉をなくした。
彼女は泣いていた……。静かに、声も立てずに。目を瞑っているので、僕に見られていることに気づいていない。
僕は見てはいけないものを見てしまった気がした。彼女の泣く顔を始めてみた。
いつも笑顔が絶えない彼女。屈託のない笑顔が僕は好きだったんだ。どんな事があっても笑顔を振りまいて乗り切ってきた彼女……。なんで、なんで……。なんで泣いてんだよ……。

僕たちは店に到着した。バイクを止めて、店に向かうときには彼女は泣きやんでいた……。

カランカラン

店に入って席につく。

「さぁ、何食べようかな～。ねぇ、オススメはどれ？」
「そうだな……これなんかどうかな。見た目以上にいけるよ。僕はいつもこれ頼んでんだよ。」
「じゃあ、それと……あと、パフェ食べよっかな～。」
「よーし。おばさーん。いつもの二つに、あとパフェ一つ～！」
「いつもありがとうね。ありゃ？今日はコレ連れてんのかい？めずらしいこともあるもんだね～ふふふ……。」

おばちゃんは小指をチラチラさせながらにやっと笑った。

「何言ってんだよおばちゃん！ちが……。」

僕が最後まで言い切る前に、彼女は言葉を遮った。

「結婚を前提におつきあいさせてもらってます！」
「えぇ！？なに言ってんの？！朋！」
「いいじゃん、別に。それとも、あたしじゃ不足？」
「別にそんなんじゃないけど……なんか今日の朋、変だよ。」
「そんなことないよぉ。」
「……。」

やっぱりなんかあったんだな……。笑顔がどことなくぎこちない。
気まずい雰囲気が二人の間を支配する。まるで、写真の中にいるみたいに時間が止まったかのようだった。互いに目をあわさない。

『まずいよ・・・・。これ絶対やばいって・・・・。』

僕は心中穏やかではなかった。第一、女の子と一緒に飯にくるなんて生まれてこのかた一度もなかったことだし。部活仲間の女子と

一緒に来ることはあっても、二人きりでくることはまずなかった。

『どうすればいいの～～～　（泣）』

そこで助け舟が来航。

「は～い。おばちゃん特製の手作りハンバーグセットお待ち！」

「うわぁ～。ほんとにおいしそう！！」

「だろ！？人はどうあれ、ここのハンバーグは天下一品なんだよ。」

「なんだい・・・その言い草は。まったく、今度からサービスしないからね。」

「あああぁぁ！！ごめんおばちゃん！ほんとごめんって！！マジで今月経済的に厳しいから！！許して（泣）！！」

「えぇ～～？どうしようかなぁ～～？」

「何でもするから～～（泣）」

「じゃあ、最近忙しくて肩こってるからマッサージでもしてもらおうかしら・・・・」

「ほんと！！それで許して！！！」

僕の本気で必死な顔を見て、朋ちゃんの顔が緩み始めた。

「・・・・プッ・・・・。あはははっ。一君、おかしぃ～。」

「え・・・・？」

「だって・・・・だって・・・本気で必死なんだもん。あはははっ。」

僕がおばちゃんのほうを振り返ると、おばちゃんはにこりと笑って、

『ケーキ。買ってきなさいよ。』

どうやら、僕達の様子に見かねたおばちゃんが一芝居うってくれたらしい・・・。ある意味助かったけれど・・・。

『ありがとうおばちゃん!!』

僕達は楽しいひと時を過ごした。彼女は前と変わらない笑顔で楽しそうで。本当に僕もうれしかった。

でも、僕にはさっきの朋ちゃんの涙が何を表しているのか、僕にはそのとき、まだわからなかったんだ。そう、そのときまでは・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5949e/

MISS YOU

2011年1月14日18時07分発行